

J. S. バッハ：無伴奏チェロ組曲 第3番、第5番

J. S. バッハの《無伴奏チェロ組曲》（全6曲）が書かれた年代は、ケーテンの宮廷楽長時代（1717～23）の前期と推定されている。各組曲は「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジグ」の4つの舞曲を基本としながら、第1曲に「プレリュード（前奏曲）」を、ジグの前の第5曲に「メヌエット／ガヴォット／ブーレ」のいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。

第3番の第1曲プレリュードは、16分音符が淀みなく流れるスケールの大きな音楽。第2曲は、軽やかな愛らしさを感じさせるアルマンド。第3曲は、音階的な分散和音とスラーで奏されるイタリア型クーラント。第4曲は、典型的なサラバンドのリズムに旋律が勝っていく瞬間が美しい。第5曲ブーレは、演奏会用の小品として奏される機会も多い。第6曲は、終曲にふさわしい堂々としたジグとなっている。

第5番は、全編にわたりフランス風の性格を持っている。第1曲はフランス序曲形式のプレリュード。荘厳な雰囲気が始まる序奏部に速いテンポの主部が続く。第2曲もフランス風のゆったりとしたアルマンド。第3曲は、軽快に駆け抜けるイタリア型とは異なり、繊細なリズムを持つフランス型クーラント。第4曲は、8分音符の分散和音が深い瞑想へと誘うサラバンド、第5曲は躍動感ある第1ガヴォットに対し、第2ガヴォットの流れるような3連符が印象的。第6曲は、強拍部に付点リズムが置かれた特徴的なジグで締めくくる。

ブリテン：無伴奏チェロ組曲 第1番

1960年にチェロの名手ムスティスラフ・ロストロポーヴィチと出会ったブリテンは、3つの無伴奏チェロ組曲を含む一連のチェロ作品を生み出した。全9曲からなる「無伴奏チェロ組曲 第1番」は、1964年に作曲され、翌年のオールドバラ音楽祭でロストロポーヴィチによって初演された。

朗々と歌い上げる「第1のカント（歌）」に続く「フーガ」では、軽快にスタッカートで刻む第1主題と流麗なレガートの第2主題が交互に現れ、次の「ラメント」では、悲痛な旋律が響きわたる。厳かな「第2のカント」に、ピチカートのみで奏される「セレナータ（小夜曲）」が続き、「マルチア（行進曲）」では、どこか童心を思い起こさせるような音楽となる。「第3のカント」は、不協和音が多用され、不穏な空気のまま最後の音が、次の「ボルドーネ」へとつながっていく。ボルドーネの前半は即興風で、D音が持続したまま、後半は民謡風の旋律が乗せられる。終曲となる「無窮動と第4のカント」は、目まぐるしく動くフレーズが、カントによってしばしば遮られ、そのせめぎ合いが高揚感をもたらし、最後は決然と曲を閉じる。

J. S. バッハ：無伴奏チェロ組曲 第6番

第6番は、本来5弦チェロ（高音側にE線が追加された）のために書かれており、通常のカチェロでは演奏が困難とされるが、技巧的にも内容的にもスケールが大きく、充実した作品である。第1曲は、2本の弦にまたがって同音高を弾くなど、弦楽器ならではの技巧が凝らされた難度の高いプレリュード。第2曲は、美しい陽光が射し込むような抒情的なアルマンド。第3曲は、軽やかさが心地よいイタリア型クーラント。第4曲のサラバンドでは、重音の合間を縫うように紡ぎ出される旋律が美しい。第5曲は、素朴な舞曲的雰囲気を持つガヴォット。第6曲ジグは、様々な音型が見事に組み合わせられており、これをもって「無伴奏組曲」のフィナーレとなる。